

よる口蓋裂誘発は、口蓋突起の癒合の阻害というよりは、発達の阻害、挙上の遅延によって接触が起こらないためであると結論できる。

9. Role of bile salt hydrophobicity in distribution of phospholipid species to carriers in supersaturated model bile solutions

(過飽和人工胆汁中の脂質担送体へのリン脂質分子種の分配における胆汁酸疎水性強度の影響について)

土本 伝 哉 (内科学第一)

【背景】胆汁中脂質の存在様式は、胆汁酸ミセル形成能や、リン脂質疎水性強度に規定される。本研究では、胆汁酸疎水性強度の胆汁脂質分布に与える影響をリン脂質分子種に着目し検討した。

【方法】コレステロール過飽和人工胆汁を作製し、疎水性強度の異なる胆汁酸を含むバッファーを用いたゲルクロマトグラフィー法で、ベジクル、ミセル分画に分離し、各分画の脂質を測定した。又各分画のリン脂質疎水性強度を逆相高速液体クロマトグラフィー法の溶出時間から算定した。

【結果】胆汁酸疎水性強度に対し脂質のベジクル分画への分布は逆相関、ミセル分画へのそれは正の相関、ベジクル分画のコレステロールリン脂質比(以後 C/P 比)は、正の相関、ベジクル分画のリン脂質疎水性強度は逆相関を示した。

【結語】胆汁中胆汁酸疎水性強度の増大は、ベジクル分画の C/P 比上昇と、ベジクル分画のリン脂質疎水性強度減少により胆汁のコレステロール保持能を低下させる。

10. Enhanced expression of inducible nitric oxide synthase and nitrotyrosine in gastric mucosa of gastric cancer patients

(胃粘膜における誘導型一酸化窒素合成酵素(iNOS)およびニトロチロシンの発現と胃癌発生との関連)

後藤 豊子 (内科学第一)

Hp 感染と胃癌の関連を明らかにするため、胃粘膜における iNOS とニトロチロシンの発現を検討した。対象は1975から1992年の間に胃内視鏡検査を施行し、長期経過観察中に胃癌が発生した34例、胃癌が認められなかった *Hp* 陽性群51例、*Hp* 陰性群8例である。初回の検査時に採取した組織を用い、iNOS とニトロチロシンの発現は免疫染色法、炎症の程度はHE染色、*Hp* 感染は Giemza 染色標本にて行った。iNOS とニ

トロチロシンの発現は、*Hp* 陰性群に比べ *Hp* 陽性群で有意に高率で、*Hp* 陽性群のうち、胃癌発生群と *Hp* 陽性コントロール群を比較すると、組織障害および *Hp* 感染の程度には差がなかったが、iNOS およびニトロチロシンの発現レベルは、前者で有意に高値であった。iNOS とニトロチロシンの発現は *Hp* 感染により増加し、これらの過剰発現が胃癌発生の一因として関与していることが示唆された。

11. Ergonovine-Induced Alterations in Coronary Flow Velocity Preceding Onset of Occlusive Spasm in Patients without Significant Coronary Artery Stenoses

(冠攣縮性狭心症のエルゴノビンによる冠動脈攣縮誘発時に生ずる冠血流速度変化)

山田 忠 克 (内科学第一)

本研究では冠動脈攣縮時の冠循環の変化を経時的に測定しその臨床的有用性について検討した。対象は冠攣縮性狭心症20例と冠動脈に異常のなかった胸痛症候群27例。ドップラーガイドワイヤーを冠動脈内に挿入しエルゴノビンによる冠攣縮誘発時の冠血流速度をモニターした。胸痛症候群例では拡張期流速は軽度増加した。一方、冠攣縮性狭心症例では2種類の特徴的な血流速度変化がみられた。第1型は初期に流速の増加の後、突然減少する変化(16/20例)、第2型としては徐々に減少する変化(3/20例)がみられた。以上の特徴的な変化から誘発開始後1分以内に血流速度の100%以上の増加を異常高流速、また開始後3分間で50%未満への減少を異常低流速と設定した。この診断基準による感度は誘発開始から、1分後35%、2分後75%、3分後85%と良好であった。異常血流速度は心電図の虚血性変化より早期に出現し冠攣縮の早期検出が可能と考えられた。

12. Gallyas- and tau-positive glial structures in motor neuron disease with dementia

(痴呆を伴う運動ニューロン疾患にみられたガリアス染色陽性、タウ陽性のグリア細胞内異常構造物の検討)

野田 公 一 (内科学第三)

痴呆を伴う運動ニューロン疾患の三剖検例に認めたガリアス染色陽性、タウ陽性のグリア細胞内異常構造物について検討した。これらは主に、海馬、海馬傍回、扁桃体のニューロピルに存在し、糸状あるいはグリア細胞の核を取り巻く様相を呈していた。ガリアス染色と炭酸脱水素酵素2に対する一次抗体を用いた免疫組

織化学との二重染色では同抗体陽性の稀突起膠細胞の細胞質に糸状構造物が局在していた。電顕像では卵円形の核の周囲に 15 nm 径の線維を含む網状構造物として観察された。これらの異常構造物が出現した部位では神経細胞脱落およびグリオーシスを呈していたことから、グリア細胞におけるタウ蛋白と関連した細胞骨格異常が本疾患における変性過程と関連している可能性が示唆された。